使徒言行録 15 章 6－21 節
「初めての会議」

1517 年 10 月 31 日、マルティン・ルターは、「恵みのみ、信仰のみ、聖書のみ」として当時のカトリック教会を否定しました。今日は、宗教改革の時に議論された「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ」の「信仰のみ」について、改めて聖書から見てまいりたいと思います。今日の箇所は、初代の教会において行われた一つの会議のことが語られています。「エルサレムの使徒会議」、あるいは「エルサレム会議」です。紀元48、49年ごろに行なわれたこの会議こそ、キリスト教会のその後の歴史に決定的な影響を与えたと言うこともできるのです。

エルサレム会議が行われることになった経緯は、次のような内容でした。ユダヤから下ってきた人々が「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていました。これは異邦人を主たるメンバーとするアンティオキア教会において、大問題でした。主イエス・キリストを信じて洗礼を受けることによって救われると教えられ、そう信じてきたのに、それは間違いだったのか、と。パウロやバルナバは当然彼らに反論しました。私たちの救いは、主イエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しを信じることによって与えられる。ユダヤ人にならなければ救われないということはない、異邦人は異邦人のままで、キリストの救いにあずかることができる、というのが彼らの主張です。そのようにして両者の間に、激しい意見の対立と論争が生じたのです。その対立を収拾するために、エルサレム会議が開かれたのです。救われるのは主イエス・キリストを信じることによってか、それとも割礼を受けてユダヤ人になることによってか、ということです。

そのような議論が重ねられた末に、この会議の結論を導き出す決定的な発言したのは、ペトロとヤコブでした。二人とも、エルサレム教会を代表する人物です。7－11 節にあるようにペトロは、自分が異邦人への伝道のために神さまに選ばれて用いられたことを振り返っています。それは10章のローマの軍人コルネリウスへの伝道のことです。今や旧い律法や割礼に代って、主イエス・キリストを信じる信仰によって、神さまはご自分の民を集めようとしておられる。そしてその恵みに、異邦人をも加えて下さっている、と。ペトロ自身も、その事実を受け入れるのには時間がかかりました。しかし彼はこの体験を通して、神さまの救いの恵みを深く知らされていったのです。11節「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」。私たちは、主イエスの恵みによる救いを信じて洗礼を受けるのです。もしも私たちが、洗礼を受けているから自分は救われる、と思ってしまうとしたら、それは、ユダヤ人が割礼を受けているから自分は救われる、と思っていたのと同じことになってしまいます。「主イエスの恵みによって救われる」とは、私たちは自分の中に、救われるに相応しい条件など何も持っていないし、持つ必要がない、ということなのです。

ペトロに次いで、ヤコブも発言しました。彼はアモス書9章11～12節を引用して語りました。ヤコブは、ペトロが自分の体験を通して語った救いの御業を、聖書の言葉によって裏付け、それが確かに神さまの御業であることを証明したのです。この会議の結果は、「ただ恵みのみ、信仰のみ、聖書のみ」によって、私たちは救われるものとなり、世界へとキリスト教が伝わりました。常に御言葉に立ち帰り、御言葉に聞きながら、神さまの新しい御業に従っていくという姿勢を、私たち個人が、教会全体が大切にしていければと思います。